

書評

【評者】
田中まゆみ
北野病院・総合内科部長



ソーリー・ワークス！

医療紛争をなくすための共感の
表明・情報開示・謝罪プログラム

ダグ・ヴォイチェサク、ジェームズ・W・サク
ストン、マギー・M・フィンケルスティーン 著

前田正一 監訳

児玉 聡、高島響子 翻訳

A5判 頁216 2011年
定価 2,730円(本体 2,600円+税5%)
[ISBN978-4-260-01493-9]医学書院刊

2012年10月に日本脳炎予防接種後の急死例が大々的に報道された。このケースでもそうだが、医療事故には複雑な要因がからんでおり、過誤の有無、過誤が悪い結果(死亡・後遺症など)の唯一の原因であったのかなど、すぐには結論が出ないことが多い。しかし、被害者にとっては「予期しない悪い結果」の原因は人為をまず疑うのは当然であろう。もし初期対応が不適切であると、加害者 vs. 被害者の対立構図が生じ、訴訟に至ってしまう。

しかし、医療訴訟に勝者はいない。信頼を裏切られた患者家族だけでなく、疑われたうえ「訴訟中は何もしゃべるな」と厳命される医療者もまた苦しむ。司法解剖がされたとしてもその結果は遺族にも医療者にも知られることはないで、再発防止にも役立たない。最終的には医学的に医療過誤とはいえないという結論で終わることも多いが、それを「医療とはもともと不確実で未熟なものであり、司法でそれを裁くには限界がある」というふうにはではなく、「医療訴訟では患者側が勝つことは難しい」というように受け止められてしまう。

医療訴訟では被害者も加害者も救われない、というのなら、それに代わる医療事故の良い解決方法はないのだろうか。本書は、医療者がすぐにも実行できるいくつかの重要な提案をしている。

まず、医療行為が悪い結果に終わった場合は、何をおいても、医療者側は共感のこもった遺憾の念を心から表明すべきだということ。とにかく「残念な結果に終わった」事実を認め、無念さを遺族と共有する場をもつ。次に、真実の解明のためにすべての情報を公開すること。

真っ先に「ソーリー(本書での和訳は『すみません』)」と言うのは、遺族と医療者が共に死者を悼んでおり、対立しているのではないことを示すのに非常に有効だ、と著者は言う。積極的に完全な情報公開も、医療者側も同じように原因究明・再発防止を願っていることの確認になる。対立する必要は全くないのである。

もちろん、いくつかの留意点がある。ここでの「ソ

ーリー」は日本語に訳すと「こんな結果に終わって残念です(共感の表明)」という意味であり、「ごめんなさい(謝罪)」ではない点が第一。第二に、「責任」と「お金」については病院全体が調査してからしか対応できないので「私の一存では決められません」と即答を避けること。第三に、もしも十分な調査でも医療者側に不適切な点が見つからない(医療水準を満たした治療であった)場合は、決して和解してはならない(訴訟になったら、『毅然と受けて立つ』しかない)こと。第四に、医療者側に不適切な点があったなら、その情報をすべて示してから、きちんと場を設定して心から謝罪すべきであること(とにかく謝るのではなく、原因調査報告を提示して謝ることが大切)。そして最後に、賠償金を支払うことになった場合は、以後の請求権を放棄する書面に署名してもらうなど、条件を明確にして後顧の憂いを断つこと。

『ソーリー』と言うな、言ったら非を認めたことになり訴訟で不利になる」と言い続けてきた張本人の米国人が何を今さら、と多くの日本人は反発するかもしれない。だが、情に流されて法的に穴だらけの対処をしてしまう(福島県立大野病院事件で、医療事故保険金を遺族に払うために安易に非を認めた調査報告書を書いてしまい、それが刑事告発に利用されたことはまだ記憶に新しい)、日本の文化の甘さを思い知らされる「留意事項」の数々こそが、実は本書の真骨頂であろう。「弁護士に頼むのはお金の話になってから」というのも、本書が米国で喝采を浴びたゆえんであろう(弁護士は、そもそも、患者と医療者が対立していなければ出る幕はない)。

記者は、文化も法律も異なるなかでの翻訳に苦労されたと思う。しかし、以上のようなメッセージは明快に伝わってくる。契約社会・訴訟社会での「成熟した」態度を日本の医療界も身につけねばならない。本書が、「不幸な医療事故が不毛な医療訴訟になる」ことを防ぎたいすべての関係者(医療・司法・行政・報道)の大きな助けになることを確信する。